

清規に於ける往生思想と永瑩二規

博林皓堂

一序言

今や未曾有の非常時局に直面し、各方面に亘り純日本的なものゝ検討が行はれてゐる折柄、皇紀三千六百年を迎へたることは誠に意義深い。吾等もまた禪の主流的なるものゝ検討を通じて此光榮を荷はんとするものである。

禪淨の雙修、混淆の問題は禪宗史上重要な研究題目である。その起原は支那に於ては後漢の安世高が多くの禪經の譯出と共に、無量壽經をも翻譯した（失譯）ることは、禪淨雙修の端を爲すものではないかと云はれてゐるが、其の最も明白なるものは東晉に於ける廬山の慧遠であつて、白蓮社に於ける念佛禪として有名である。併し祖師門下の禪師にして禪淨雙修したる者は五、祖弘忍門下に宣什があり、牛頭法融の第四世延祚寺の法持があるが、その最も代表的なものは『宗鏡錄』の著者として知らるゝ宋代の永明延壽であつて、彼の『萬善同歸集』は後代の禪淨合一の端を爲すものとせられる。併乍ら今は問題を清規に限定し、其が各種の清規に如何に表はれてゐるかを檢し、更に純

乎として純なる禪を唱導したる道元禪師、並に其の立場から編述された『永平清規』及び瑩山禪師の『瑩山清規』について考察して見ることにする。

二 百丈古清規と禪淨雙修の問題

禪門に於ける清規の起原は唐の百丈懷海の禪刹開創に始まる。勿論その歲月は明かでないし現存もしてゐない。たゞ宋の景德元年（西紀一〇〇四）學士楊億が『傳燈錄』を冊定したる時撰したる序——これを古清規序と云つてゐる——に原書の面目を髣髴たらしあるだけである。この序は『傳燈錄』百丈章の外、『禪苑清規』第十卷、『勅修百丈清規』の附錄にも載せてある。三本を對照すれば一字一語の相違はあるが大意に於て變りはない。今これに依つて觀れば百丈の清規は

佛殿を立てず唯だ法堂を樹て、集まれる所の僧衆は盡く僧堂に掛搭せしめ、具眼の長老を請して化主（住持）と爲して方丈に居らしめ學者の接化に當らしめる。その任たるや住持に在ては朝暮の上堂陞座、大衆に在ては坐禪入室請益であつて、賓主間酬して宗旨を激揚する、二時の粥飯は節儉を意味し普請の法は上下の協力を主眼とする、十務を置き首領を任じ、又維那をして大衆を統轄せしめ、不如法の者を擯罰せしめることは清衆を安ずるを貴ぶ爲めである……。（取意）

と云ふが其大要である。これに由て觀れば百丈の古清規は、後世の清規の重要な規繩を其原形として概ね備へて居ると云ふべきであるが、その何れにも淨業を修したと思はれる點はなく往生淨土の思想もない。尤も明の宗本の『歸元直指集』によれば

百丈大智海禪師……天下叢林依他建立……天下清規依他舉行……看他爲病僧念誦之規云。集衆同聲舉揚一偈。稱讚阿彌陀佛。復同聲稱念南無阿彌陀佛。或百聲或千聲。回向伏願云。諸緣未盡。早遂輕安。大命難逃。徑登安養。此非淨土之指歸乎。又看。他津送亡僧。大衣念誦。回向伏願云。神超淨域。業謝塵勞。蓮開上品之華。佛授一生之記。此非淨土之指歸乎。至於荼毘之際。別無所爲。但令維那引聲。高唱南無西方極樂世界。大慈大悲阿彌陀佛。如是十唱而大衆十和。總名之曰三十念佛也。唱畢復回向云。上來稱揚十念。資助往生。此非淨土之指歸乎。自百丈以來。凡所以津送亡僧。皆依此法。(上卷・諸祖指歸淨土文・十六)

とあり、「百丈以來みな此法に依る」と云ふに觀れば病僧念誦または亡僧を津送する場合、阿彌陀佛を念じ淨土に往生せんことを祈るは『百丈古清規』に既に規定され、其が展轉して當時尙ほ行はれて居ると宗本は云ふのであるが、彼は明代の人でありその『歸元直指集』は萬表の序に依れば明の隆慶年中(西紀一五六七・一五七二)の作の様であるから、それは百丈滅後凡そ七五〇年のものとなる譯である。故にこれを以て直に百丈その人を禪淨雙修の人とし其清規を同様のものであつたと速斷する事は出來ぬ。恐らく宗本は當時流布の『勅修百丈清規』に依つて右の如き説を爲したものであらう。即ち『勅修清規』は『禪苑』『日用』『校定』『備用』等の前代の諸清規を取捨折衷して大成したと云はれるのであるから、百丈の古意を其儘傳承してゐるものと見做し、其故に『勅修百丈清規』の病僧念誦等は總て百丈親しく撰する所と觀たのであらうが『勅修清規』は百丈を去る五百二十餘年のものであり、諸方の禪林の清規が不統一である所から勅命に依つて編纂せられたるものである以上、其が百丈の厚意をそのまま傳へてゐるか否かは疑はしい。思ふに禪律の混淆を排して坐禪專修の禪院を創設したる百丈が、律に代ふに念佛を以てしたとすれば其は甚だしき不合理でなければならぬ。それ故に百丈及び『百丈古清規』には禪淨雙修が無かつたと見るべきである。『百丈語

錄』及び『百丈廣錄』には勿論それは見えぬ。

註：百丈古清規に就ては從來、原本は早く散失し楊億の序のみが存するとせられてゐるが、最近、古清規は編纂されたものではなく、楊億の序のみが後から作られたのではないかと云ふ説がある（禪學研究第三一號）が、今は古來の説に従つて置いた。

三 禪苑清規に於ける往生思想

百丈の滅後二八七年すなはち宋の徽宗崇寧二年（一一〇三）に長盧の宗赜が『禪苑清規』十卷を著はした。現存清規書の最古のものであつて、著者は諸方の叢林を歴訪し親しく見聞する所に依つてこれを纏めたと云つてゐる。宗赜は雲門下の天衣義懷の孫であるが、懷も亦禪淨雙修の人と云はれるから頗る此事あるは當然である。今これを檢するに先づ『禪苑清規』第四卷延壽堂主の項には病僧重病ならば維那に報じて重病閣に移せと云ひ、細註を以て

若非道眼精明。竝勸令専念阿彌陀佛。祈生淨土。若勸率同袍打磬念佛之極妙。

と云つてある。又第七卷の病僧念佛には

今晨即有在疾比丘某人。奉爲釋多生之冤對。懺累劫之愆尤。特運至誠。仰投清衆。稱揚聖號。蕩滌深殃。仰憑尊重。念清淨等。又廻向云。伏願某人。一心清淨。四大輕安。壽命與慧命延長。色身與法身堅固。如重病之人。即與十三念阿彌陀佛。念佛之法。先嘆彌陀佛罷。次自衆爲某人。長聲念阿彌陀佛四聖名號。廻向云。伏願某人諸緣未斷。早遂輕安。大命難廻。願生安養。又念三四聖名號罷。勸令攝心清淨念。不得攀緣俗事也。

とある。これは病僧の爲に輕安を祈るのであるが、特に重病の場合は大命の廻らし難きを察し阿彌陀佛を十念して、速に安養淨土に往生せんことを祈るものであつて、前述の『歸元直指集』並に其が本づくと思ふ、『勅修百丈清規』の記事と酷似してゐる。故に是を逆に云へば其等がこの『禪苑清規』の記事に倣つたと見られる。さて右の内重病人に對しては快癒を祈らず、反つて速に淨土に生ぜんことを祈る如き、願生淨土の行人としては當然であるが、それは勿論淨土穢土の相對であるから禪僧の思想信仰としては二元的であつて不徹底たるを免れぬ。更に『禪苑清規』には右病僧念誦に引續き亡僧の喪法及び廻向文を擧げ、龕前念誦には

切以生死交謝。寒暑迭遷……恭投_ニ大衆。肅_ニ詣龕幃。誦_ニ諸聖之洪名。薦_ニ清魂於淨土。仰憑_ニ大衆_ニ念……又廻向云。
伏願神超_ニ淨域_ニ、業謝_ニ塵勞_ニ、蓮開_ニ上品之華_ニ、佛授_ニ一生之記。

と記し、塔前十念には「乃稱_ニ十念_ニ罷云。上來稱_ニ揚聖號_ニ、資_ニ薦_ニ往生_ニ。惟願慧鏡分_ニ輝。眞風散_ニ彩。」唱衣前念誦には「資_ニ助覺靈_ニ、往_ニ生_ニ淨土_ニ。」畢つて後には上來大衆念誦並唱衣物功德。並用廻_ニ向沒故某人。資_ニ助覺靈_ニ、往_ニ生_ニ淨土_ニ。再煩_ニ大衆_ニ念。」と云ひ、又別に「下火訖_{當_レ有_ニ}法_語十念阿彌陀佛。再聲_ニ法事_ニ罷散。」ともある。是に由て觀れば『禪苑清規』に於ける亡僧の喪法は往生淨土を資薦することを主眼とするものである。而らば尊宿住持の場合は如何と云ふに、尊宿遷化の項に其の作法を指南して居るけれども念誦等は一つも擧げてないが、「若焚化、即請_ニ尊宿一人_ニ舉火_ニ、若入塔_ニ撒土_ニ、然十念等如_ニ亡僧之禮_ニ」とあるに徴すれば、亡僧の場合と同一であつたとせねばならぬ、而して十念とは前述の十念阿彌陀佛のことであるから、尊宿住持の示寂に對しても念佛に依つて往生淨土を資薦したるものと解すべきである。果せる哉『禪苑清規』に倣つた『校定清規』勅修清規の尊宿喪法を見るに、涅槃臺念誦には「十念阿彌陀佛」とし全身入塔念誦には「資助往生」として居る。これは勿論『禪苑清規』の尊宿喪法に於ける念佛

を彷彿せしむるものであるが、兎に角これに由つて師家分上の尊宿住持も未だ迷途を脱却せざる亡僧も、俱に彌陀に助けられて始めて往生を遂ぐることとなる譯であつて、こゝに禪淨雙修の失と師學無分の失とが有る様である。

『禪苑清規』に於ける往生淨土の思想は右喪法には極めて明白に表はれて居るが、仔細に點検すれば其他にも存する即ち

早晨長版。齋時三下。方可下鉢。入堂時、念佛時。竝不得覆頂……。（第三卷）

粥街坊……般若頭。經頭。彌陀頭。竝是外勸檀越。增長福田。内助禪林。資持道果……。（第四卷）

至行香罷。法事唱如來梵……跪爐頭讀疏念佛就坐同前。（第六卷）

維那表歎。宣開啓疏。念佛闡黎作梵。候聲絕。然後大衆聞經。（第六卷）

三八聞三大鐘或堂前小鐘者。念誦也。城隍集衆念佛。皆打小鐘。山林先黃昏鳴大鐘者。行者上殿念佛也。擊大鐘集衆。然後擊小鐘念佛。

等とあつて諸所に見られるのであるが、右に挙げた念佛が悉く「念阿彌陀佛」であるとは限るまい。しかし兎に角編者の禪淨雙修の思想信仰が全編に溢れてゐると思はれる。抑々禪門に於ける彌陀及び淨土觀は彼の「維摩經乃至六祖壇經」に明白に説かるゝ如く、己心の彌陀、唯心の淨土とすることが正義である。前述の喪法に見らるゝ所を以てすれば宗墳の所見は如何にしても爾かく解決することは出來ぬけれども、且らく他の文献に就いて此點を更に點検すれば、娑婆即寂光土なるが如く指方立相なるが如く、更にまた「念佛參禪、理同一致」とあつて頗る矛盾撞著するものがある。故に『禪學思想史』（下）は『淨土簡要錄』の

念佛不礙參禪。參禪不碍念佛。法雖二門。理同一致。上智之人凡所運爲。不著二諦。下智之人各立一

邊。故不_ニ和合_一。多起_ニ紛爭_一。故參禪人破_ニ念佛_一。念佛人破_ニ參禪_一。……是故念佛參禪。各求_ニ不_レ旨_一。谿山雖_レ異_一。雲月
是同_ニ……。

を引き、參禪念佛、理同一致ならば何れか其一に徹すれば足るに非ずやと評してゐる。また宗頃が、娑婆即寂光土となすことは、『樂邦文類』卷二乃至前述『歸元直指集』上巻に見えてゐる。即ち「長蘆頃禪師勸_ニ參禪人兼_ニ修淨土」の文に

是以實際理地。不_レ受_ニ一塵_一。則上無_ニ諸佛之可_レ念_一。下無_ニ淨土之可_レ生_一。佛事門中。不_レ捨_ニ一法_一。則攝_ニ諸根_一。蓋有_ニ念佛三昧_一。還源要術_一。示_ニ開往生一門_一。所以終日念佛。而不_レ乖_ニ於無念_一。熾然往生。而不_レ乖_ニ於無生_一。故能凡聖各住_ニ自位_一。而感應道交_一。東西不_ニ相往來_一。而神遷_ニ淨域_一。……

とあり、彌陀を己心に見ることは同じく『樂邦文類』卷五勸念佛頌に「極樂不_レ離_ニ眞法界_一。彌陀即是自心王_一」とあるのであつて、此に由て見れば禪の淨土觀に反かぬのであるが、通じて見れば一方に於ては禪淨不_ニ二を説き己心の彌陀唯心の淨土を説き乍ら他方に於ては指方立相の淨土を求めてゐることになる。これを要するに『禪苑清規』に於ける淨土思想は編者宗頃自身の信仰より出でたるものであつて、喪法の淨土思想の如きも百丈の清規を踏襲したるものとは言ひ得ないであらう。道元禪師は『禪苑清規』の坐禪儀に對し百丈の古意を歪曲したと云つてゐるが、以上に依つて見れば宗頃が百丈の古意を埋却したる事は坐禪儀一つに止まらぬ譯である。

四 入衆日用・校定・備用・勅修清規に於ける往生思想

『禪苑清規』に次いで出でたるものは無量宗壽の『入衆日用清規』であつて、南宋の嘉定二年（一二〇九）の撰である。

それは『禪苑清規』の著はされたる崇寧二年よりは一〇六年後になるが、叢林に於ける一日中の行事日課を記述したものに過ぎない。此清規に於ける往生淨土の思想を求むるならば

從朝寅旦直至暮。一切衆生自回五。若於脚下喪身形。願汝即時生淨土

がその第一であつて又別に

如堂殿禮拜、不得占中央、妨住持人來。不得出聲念佛。

とも云つてある。但し此の念佛が單なる唱佛名であるか否かは明瞭でないが、前の偈に照應すれば矢張り念阿彌陀佛と解せられるのであつて、禪僧の思想信仰として純粹なるものではない。此點宗壽禪師も宋朝一般の禪淨併修の風潮を脱し得ざりしものゝ如くである。

『日用清規』に次ぐものは支那日本を通じて云へば道元禪師の『永平清規』であるが、支那だけに就て云へば『校定清規』であつて、宋の咸淳十年（一二七五）婺州金華の惟勉の撰する所である。『禪苑清規』より一七二年、『日用清規』よりは六六年後に當る。本清規に於ける往生思想は、下巻第十三病僧念誦、第十四住持涅槃、第十六亡僧の三箇所に見えてゐる。初に病僧念誦は前の『禪苑清規』と全く同じく、文字に多少の相違あると、「彌陀佛」が具さに「西方極樂世界阿彌陀佛」と記され、「長聲念阿彌陀佛四聖名號」が更に彌陀を念すること百遍、觀音、勢至を念すること十遍と其回數を規定さるゝに至つた點が相違する丈である。第十四の住持涅槃は勿論尊宿喪法であるが、『禪苑清規』のそれよりは一層詳細であつて現在わが宗門に行ふ所と大差はない。その内涅槃臺念誦には

是日則有新圓寂堂頭和尚。化緣已畢。還返真常。靈龕遍遶。拘尸。性火自焚。於此日。仰憑尊衆。資助覺靈。南無極樂世界大慈大悲（衆和云）阿彌陀佛（念十聲）。……伏願不忘恩力。再現雲花。掉慈航於生死海中。接群

迷於菩提彼岸……。

と記し、全身入塔念誦には

……仰憑三大衆。資三助覺靈。南無西方極樂世界大慈大悲云云。上來稱揚十念。資助往生。惟願慧鏡無邊。慈雲廣布。四生界內。示三不生不滅之因。六趣道中。說三無我無人之法……。

とあるが、これに出つて觀れば『禪苑清規』と同様に師家分上尊宿住持に對してもまた往生を願ふものであつて、今古去來の相を融する底の禪的未來觀ではない様である。從てそれは「收幻化之百骸。入火光之三昧」とは云へぬ。又第十六の亡僧葬法も『禪苑清規』のそれと同一であつて「薦清魂於淨土」と云ひ「神超淨域……蓮開上品之花」と云ひ、乃至「南無西方極樂世界大慈大悲阿彌陀佛十聲罷。上來稱揚十念。資助往生」と云ふ等少しも變らない。

『校定清規』に次ぎそれより三七年後に出でたるものは『備用清規』であつて、元の至大四年（一三二一）澤山式咸の編述する所であり、これに次いで元の延祐四年（一三二四）中峰明本撰の『幻住巷清規』があり、更に元の至元四年（一三三八）東陽德輝編述の『勅修百丈清規』がある。是等が『校定清規』と共に『永平清規』以後のものなることは勿論であるが、その往生思想は何れも前の諸清規同様葬法の場合に明瞭に見られ且つそれは前述する所と變りはない。従つて此三清規に就いて同様のことと繰返すは繁に堪えないので省いて置くが、『備用清規』に左の入龕念誦のあることが注意される。即ち

切以、美權普示。分化迹於人天。妙體獨存。起三玄機於佛祖。恭惟堂頭和尚。孤圓智月。俄收萬水之波。廣大悲心。却應三十方之感。瞻顏無地。披志有歸。是集真徒。讚揚聖號。爲如上緣念。清淨法身……。

これは『校定情規』には未だ記されず本清規に始めて見らるゝ所であるが、現行宗門の其れと全く同一であつて僅に

圈點を附したる三字が美は善、起は越、心は乘と相違する丈である。従つて後者が入龕念誦に關する限り『備用清規』に迄遡り得ることになるが、此念誦に「玄機佛祖に越え、廣大の悲心、却つて十方の感に應する」底の那人、尊宿住持と推稱せられる者が彌陀に依止して往生を資助するとは甚しき矛盾である。而も矛盾を矛盾と感ぜざる所に禪淨雙修者としての編者咸公の面目があるのであらう。

次の「幻住巷清規」には更に彌陀の佛德を讚歎する語があり、四十八願の文字まで表はれてゐる。「爲病人人解釋念誦」病僧念誦に同じ)に

如重病之人。即爲十念阿彌陀佛。念誦云。阿彌陀佛真金色。相好端嚴無等倫。白毫宛轉五須彌。緋目澄清四大海。光中化佛。無數億化菩薩。亦無邊。四十八願度衆生。九品咸令登彼岸。大衆長聲念阿彌陀佛十聲。四聖名號各三聲。回向云云。伏願某人。諸緣未斷。早遂輕安。大命難逃。願生安養。十方三世云々。

とあるのが其れである。尙ほ亡僧喪法は『禪苑清規』以來のそれを踏襲してゐるが、龕前の諷經に金剛經阿彌陀經を讀むことが見えてゐる。本清規には以上の外「世範」の項に於ける「送生日功德疏」に「恭詣壽延。披閱金剛般若波羅密經。某經某咒。稱揚無量佛嘉號」と云ひ、「四節土地堂念誦」の終に「伏願」として數種を舉したる中に「如來極樂世界。以無住而爲住場」とあつて此處にも欣求淨土の片鱗が見えてゐる。次の「勅修百丈清規」に於ける淨土思想も前の諸清規と同一であつて特に目新しきものはない。但し病僧念誦だけは『幻住清規』と一等であつて四十八願等の文字が見えて居る。

以上支那撰述の清規に就いて其の往生思想を觀たのであるが、翻つて宗祖の『永平清規』を見るにかくの如きものは更に無く、純乎として純なる禪の一行を以て貫くことは宗門清規の誇りでなければならぬ。而らば『永平清規』の

純粹性は如何。

註：清規に於ては祝聖が規定せられ、聖節道場を無量壽道場と稱し、或は看經し或は楞嚴疏、大悲疏または無量壽疏を誦し、畢つて金剛無壽佛人皇菩薩等と唱へるとあるが、無量壽疏は大乘無量壽王陀羅尼經、金剛無量壽佛は阿彌陀佛のことである、が聖壽無量を祈る爲に「無量」と名けらるゝものが擧げられ引かれるのであるから、これを以て欣求淨土の思想としなくても良いであらう。

五 永平清規の純粹性と其特色

『永平清規』の撰述は第一典座教訓が嘉祐三年（西紀一八九七）であり第六衆寮篋規が寶治三年（一二四九）であるから前後十三年に亘り、『日用清規』より約三〇年遅く『校定清規』よりは約三〇年早いことになる。従つて『禪苑清規』及び『日用清規』に基くけれども、其の粹を探る丈であつて正邪を混ずることはない。而して其包藏する六篇は典座教訓、對大已法、辨道法、知事清規、赴粥飯法、衆寮篋なることは言ふ迄もないが、此中には他の諸清規の如き葬法は尊宿亡僧共になく又病僧念誦もなく、専ら清衆の辨道增長の爲にする行持規程のみである。『正法眼藏』の中にも清規の部に屬すべきものは、例へ洗面、洗淨、安居等々の如く數多あれども同様に喪法なるものは何處にも見えぬ。廣清規としては是れは特例であるが、且らく道元禪師が是れを書残されたとしても、諸清規の如く往生思想を混入する如き不徹底なるものではあり得ない。それは『用心集』に

或教三人求心外之正覺。或教三人願他土之往生。惑亂起于此。邪念職于此。（第五章）
と云ひ、『辨道話』に坐禪を描いて讀經念佛に走らんとするを難じたる（問答）に微しても明かである。道元禪師に在つ

ては粥飯を調辨する典座の作務それさへも本證の妙行、作佛の舉手動足であつて即處々が成佛の直道である。故に娑婆即寂光土よりも向上であつて、粥飯これ佛祖であり庫堂即ち道場である。「這裡是れ付處の處在」である。精魂を淨土に資薦するが如きはその何れよりする高祖道に於ては全く有り得ないことである。況やその身心一如論よりすれば精魂を遊離せしめて淨土に薦ましむるが如きは癡迷の甚だしきものである。

また「永平清規」の辨道法一篇は先の無量宗壽の「日用清規」に基き、是れを廣說したるものとせられる。而して其内容とする所は主とし叢林一日中の行事、即ち所謂日分行事を叙したるものであるが、「日用清規」に在つては其の一貫する精神は前述の從朝寅旦直至暮、一切衆生自回互、若於脚下喪身形、願汝即時生淨土に明かなる如く「生淨土」に在ると見られるのであるが、「辨道法」に於ては

佛佛祖祖。在レ道而辨。非レ道而不辨。有レ法而生。無レ法而不レ生。所以大衆若坐。隨レ衆而坐。大衆若臥。隨衆而臥。動靜一ニ如大衆。死生不レ離叢林。拔レ群無益。違レ衆未儀。此是佛祖之皮肉骨髓也。亦乃自己之脫落身心也。然則空劫以前之修證也。無レ拘ニ現成。朕兆以前之公案也。未レ待ニ大悟。

とある如く、空劫以前の修證としての行事のみであつて、起床も打眠も、洗面も洗淨も乃至坐禪經行も其の立場から行はれるのである。さればこそ「死生不離叢林」の信念となるのであつて、叢林は即ち寂光土である。斯く即處即處を成佛道とする態度は勿論「日用清規」の

從朝至暮。要レ三頭頭敗闕。須直ニ一一遵行。然後敢言。究レ己明レ心。了レ生達レ死。

と云ふ如きものではない。右の文に由つて觀れば先づ清規に従つて身行を整へ、然る後に自己を究明し生死を了達せよと云ふ如くであつて、清規の一々に成佛得脱を見出し即處々を淨土とするものではない。彼に在ては清規の實踐

は得道への一階梯であつて其自身絶対の行ではない。従つて其は最高の意味に於ける威儀即佛法、作法是宗旨なる命題を產出さぬ。

各種の清規と「永平清規」乃至「正法眼藏」中の清規に關する諸卷との著しき相違は、前者がたゞ各種の行事規定を列舉する丈であるに對し、後者は其に先立つて豫め其の意義精神を明かにし本證の行事なることを強調する點にある。従つて前者に於ては行事が多般詳細であればある程繁雜を覺える懼れなしとせぬ。是れに反し後者に於ては其れは一々生命的行事として深き感激を生ぜしめる。「辨道法」の「佛々祖々道、に在つて辨す」は既に言つたが、「典座教訓」には「佛家從_レ本。有_ニ六知事_一。共爲_ニ佛子_一。同作_ニ佛事_一」と云ひ、能行は佛子、所行は佛事佛行なることを明し「赴粥飯法」には

經曰。若能於_レ食等者。諸法亦等。諸法等者。於_レ食亦等。方令_ニ教法而等_一。教_ニ食而法等_一。是故法若法性。食亦法性。法若真如。食亦真如。法若一心。食亦一心。法若菩提。食亦菩提。名等義等。故言_レ等……是以法是食。食是法也。是法者。爲_ニ前佛後佛之所_ニ受用_一也。此食者。法喜禪悅之所_ニ充足_一也

と述べて法食一如なることを明にしてゐる。かくして「對大己法」(大己五夏十夏の闍黎に對する儀禮)「が實是大乘極致也」と結ばれるごとになるのである。若し是を「正法眼藏」に見るならば「洗淨」に於ては

身心これ不染汚なれども、淨身の法あり、淨心の法あり、また身心をきよむるのみにあらず、國土樹下をもきよむるなり、國土いまだ塵穢にあらざれどもきよむるは、諸佛之所護念なり、佛果に至りてなほ退せず廢せざるなり。

と云ひて不染汚の修證(本證の洗淨)なることを明し、「安居」に於ては

佛祖の眼睛頂顎を招來して、九旬安居あり、安居一枚すなはち佛々祖々と喚作せるものなり、安居の頭尾これ佛祖

なり。このほかさらに寸土なし、大地なし夏安居の一概これ新に非ず舊にあらず、來にあらず去にあらず……。

と述べて、時の新舊去來に非ること並に一瞬と永遠との一如なる旨を教へられてゐる。これ即ち時間的に見られたる寂光土である。かく道元禪師に於ては、清規の問題を以てすれば如何なる清規の問題も、一々絶對の行事であり即處々々成佛の行である。道元禪師はなぜか清規にも其他の著書にも遂に尊宿亡僧俱に葬法を規定されてゐないが、以上の如き道元禪師の純乎として純なる立場からすれば、よし示されたとしても『禪苑清規』以下の各清規の其の如く精魂を淨土に薦むと云ふ如きものであり得ぬことは餘りに明白である。勿論只管打坐の一行を以て貫き是れを佛法の正門とし佛法の總府とせられる禪師に、禪淨雙修などのあり得べき筈はない。「燒香禮拜、念佛修懺看經を用ひず、只管に打坐して始めて得べし」と、この儼乎として儼乎たる禪師の立場は、勿論同時に『永平清規』の立場でなくてはならぬ。

六 瑩山清規の純粹性

此に至て最後に『瑩山清規』を一瞥する必要を生ずる。是は太祖瑩山禪師が元享四年（西紀一九八四）の撰述であつて、「永平清規」よりは八十餘年後に當り、支那撰述の清規に就いて云へば『備用清規』よりは十三年後『幻住清規』よりは七年後となる。而して瑩祖が『永平清規』に基かれたことは論を待たぬが、同時に支那撰述の清規をも參照せられたであらう。例へば繰返し述べたむ喪法の如き『永平清規』には其規定がないのであるから、道元禪師が遺されなかつたとすれば當然支那の清規に範を取る外はない。果せる哉『瑩山清規』に於ける尊宿の入龕念誦「切以。美權普示……」は前述の如く僅に三字を相違する外『備用清規』のそれと全く同一である。併乍『瑩山清規』に於ては尊

宿と僧何れも葬法全體に亘つて「十念阿彌陀」「資助往生」等が悉く省かれてゐる。此點支那清規を模して其の弊に墮せずと云ふべく、又道元禪師の純禪の立場を護るものと云ふべきである。かくて我宗門に於ける根本二大清規は全く往生思想を剣却し、何等淨土教的色彩を有せざることは宗旨を如實に發揮するものと云はねばならぬ。此事については明規の混入を防止し兩祖の清規の維持復古に勉めたる諸尊宿の功績に言及せねばならぬが、且らく以上を以て措くことにする。